

寄稿文

昨年6月から12月まで下上菅地区で、農業とボランティア活動を通して、耕作放棄地の農地化、未就業の若者が仕事をしていくきっかけづくりを目的とした「若者地域づくり支援事業」が行われました。この事業をサポートした日野ボランティア・ネットワークの山下弘彦さん

若者地域づくり支援

(根雨)に活動を通して感じたことを寄稿してもらいましたので紹介します。

日野ボランティア・ネットワーク
(ひのぼらねつと)

山下弘彦さん(根雨)

県内で増えている耕作放棄地の農地化、そして未就業の若者が仕事をしていくきっかけづくりを目的とした「若者地域づくり支援事業」が県内3地区で行われました。西部地区では日野ボランティア・ネットワーク(ひのぼらねつと)が県より委託を受け、下上菅地区を拠点に6月から12月まで活動しました。

参加したのは、17歳から28歳までの若者3人(町内2人、米子市1人)。参加者を支えるスタッフとして、ひのぼらねつとから2人、下上菅地区の方3人にも農業指導をしていただきました。

農業活動では、約75㍓の遊休農地で「そば作り」。畑の草刈りから耕運、種まき、刈り取りまで行いました。収穫量は多くありませんでしたが、初めて使った草刈り機、トラクターなどの農機具も使い方を教わり、何とか扱えるようになりまし

た。他にもナス、ピーマン、トマトなど多くの野菜を作りました。農業をしていくにあたり、周辺の環境整備、農産物の2次加工、流通経路など広い視野を持つことが大切で、これらにも目を向けるため、日頃から道路脇の草刈り、イノシシ防柵を作る活動、「里

山ものつくり大学」に参加して農産物加工品作りなどを体験。様々な活動を通して、少しでも農業集落の維持と地域づくりの手伝いができるように努めました。

もつひとつの事業の柱「ボランティア活動」。若者の就業意識を高めていくことが目的でした。

町ボランティアセンターに依頼のあった困りごとを解決する活動、ひのぼらねつと企画「高齢者誕生月プレゼント」では贈物づくりや家庭訪問。また、中越地震の被災地に贈る「かきもち作り」にも参加

直接顔が見えない人に対しても、想像を巡らせ、思いを寄せながら行動することを学べたのではないかと思います。

期間中の活動は、月に半分程度の日数。雨の日には畑の様子を見に行ったり、切ってきた竹でイスを作ったり。自然の恵みを満喫するため、昼食は自分たちで作った野菜を中心に、みんなで自炊。

「同じ釜の飯」を食べ、コミュニケーションも徐々に取り合えるようになりました。自分たちで栽培から収穫、調理して食べました。

期間中3人ともほとんど休むこともなく活動を続けました。

に発言することはありませんでした。しかし、7か月間の活動を通して状況に応じて自分の考えを言ったり、自分から進んで行動したりといったことが増えていきました。

姿勢の変化は、様々な活動に参加して多くの方と関わりを持ち、刺激を受けたり、温かく受け入れてもらえたり「ありがとう」と言ってもらえることで、自分が行動した結果を実感。それが自信につながったりすることで出てきたものだと思います。

もつひとつの発見は、サ

7か月間で成長した若者3人 行動の積み重ねが自信につながる

事業を始めたころは、自分から積極的



県広報コンクール

この
広報紙
1枚写真
組写真

3
部門で特選

取材にご協力ありがとうございました。

平成16年鳥取県広報コンクール(鳥取県広報協会など主催)が1月19日、鳥取県庁で行われ「広報ひの」が、広報紙、1枚写真、組み写真の3部門で特選に選ばれました。
3つの作品は、4月下旬に行われる全国広報コンクール(日本広報協会主催)に県代表(昨年は、広報紙町村2部で特選)総務大臣賞を受賞)として推薦されます。

広報紙で特選になった平成16年11月号は、行政に頼らず自主的に活動を続けるオシドリグループを中心に、広がる地域支援や交流の輪、オシドリ観察の魅力などを取材しました。
1枚写真は16年10月号で紹介した「コア職人」(中村庸一さん)「三谷」。組み写真は16年12月号で紹介した「フライフィッシングロードづくりの

職人」(石田秀登さん)「中菅」で、大小9枚の複数写真です。広報紙は、行政だけでなく、住民で作るものではなく、住民の皆さんの情報や協力によって作られます。いくら特選に選

ばれたからといって、実際に皆さんに読まれ、親しまれなければ意味がありません。まずは、これからも行政と皆さんを結びパイプ役として「地域のオンリーワン広報紙」を

目指して編集、発行に努めていきます。皆さんからの情報、ご意見、お便りなどお寄せください。役場企画振興課広報広聴係
電話72 03332



上)特集オシドリを掲載した広報ひの11月号。全40ページ

中)1枚写真で特選のコア職人(中村庸一さん=三谷)

下)組写真で特選のフライフィッシングロードづくり職人(石田秀登さん=中菅)



ポートした大人たちが、若者以上に生きいきとしていたこと。豊かな自然の中で様々な人と関わりながら農作業などをする活動は、若者たちだけではなく、大人を含めた多くの人が必要としていることなのかもしれません。
活動中や様々な場面で近隣の方と会うたびにやさしい声がかかる。活動が終わりに近

づくころには「みんなのおかげで、すっかりきれいになった。来なくなると元に戻るから来年も来てね」こんなうれしい言葉をいただきました。
温かい言葉とともに、担い手が少ない農業集落で、限られた時間で自分が自分たちが集落の維持活動に関わっているということ、参加した若者たちに少しでも実感してくれたらと思います。また、農

作業の指導をいただいた方、地域の皆さんの温かいまなざしが若者たちを支えていたことは、間違いありません。
この事業は1年限りですが「人づくり」「土づくり・ものづくりの農業」は、どちらも短期間で成るものではなく長期的な視点が必要です。これから担い手となっていく若者たちが元気を出してくれるよ

うな取り組みは、ますます重要になっていくと思えます。また、地域では、多くの人と関わりが持てるように、外に目を向けた取り組みも重要なのではないのでしょうか。
若者たちには、この事業に参加した期間がんばったとい

うことで終わりにせず、ここでの活動を礎のひとつとして個人としてますます成長するとともに、地域にも貢献してくれることを望んでいます。

